

「この25年間で G430ほど 大きく進化した モデルはない」

本誌独占取材
ピンの社長が語った
G430誕生秘話

前作から約2年の期間を経て
発表された『G430』。
12代目となるGシリーズの中でも
約24カ月も新ドライバーが出なかったのは
過去に1度だけ。この2年間、
どのように『G430』の開発が進んでいたのか？
今回は日本のゴルフ専門誌として唯一、
ジョン・K・ソルハイム氏に
インタビューする機会をもらうことができた。
現在はピンの社長を務めているが、
Gシリーズは元々、彼が開発チームにいた頃に
立ち上げたシリーズでもある。

話題の新作
開発ストーリー秘話

GEAR STORY

語り
ギア
リ
ノ
ア

VOL.31

PING
G430

PING, inc. 社長
ピンゴルフジャパン社長
John K Solheim
ジョン K ソルハイム

取材・構成・文／野中真一
撮影／相田克己 田中宏幸

創業から三世代続く経営方針

前作を 超えなければ 新製品は 発売しない



ジョン・K・ソルハイム氏は、
創業者カーステン・ソルハイム氏の
孫であり、90年代から会長をつとめている
ジョン・A・ソルハイム氏の長男。
ピンにとっては三世代目となるリーダーであり、
そこには創業以来続く、新製品発売の方針があった。

この写真は左の人物が創業者カーステン・ソルハイム氏で、息子であるジョン・A・ソルハイム氏を手のヒラの上で持ち上げている。この構図からカーステン氏はヒール・トゥ・バランスの「1-A」パターを改良して重量配分の設計を取り入れた初代アンサーの形状を思いつくヒントになったそう。

2004年からはじまったGシリーズ。その歴史を振り返ると約1年で次のモデルが登場することもあれば、1年半のときもあり、今回はそれが2年だった。Gシリーズの生みの親でもあるジョン・K・ソルハイム氏にそのことを尋ねると、

「最初から発売するタイミングは決めています。そもそもピンには『前作を超えなければ新製品は発売しない』という方針があります。『G425』は寛容性も高く、プロからもアマチュアゴルファーからも評価されていました。次のモデルにはそれを確実に上回るテクノロジーが必要でした。アイアンでも2018年の『i210』は歴代のアイアンの中でも一番評価が高かった。試合で使うプロからは、もうずっとこれで十分ではないか、という声もありました。だから、なかなか新製品を発売することができなかったのですが、ようやく今年、『G430』も『i230』も前作を超えるクラブが出来たと確信した。だから発売することができました」

そもそもなぜ初代に『G2』という名前をつけたのか？

「正直に言うと、当時は私も開発部門にいたので、これだけ長く続くシリーズになるとは思っていませんでした。

1996年にピンに入社し、開発部門に配属。
2001年に開発部門の統括責任者となり、
2004年に『Gシリーズ』を発表。2011年か
らはピンゴルフジャパンの社長を務めるた
めに来日。2017年にピン本社(US)の社長
にも就任。

ジョン K ソルハイム

John K Solheim

「G430の開発段階では
新しい発見が
いくつもあった」

エンジニアとしては新しいテクノロ
ジーで次世代のドライバーを作りたい
と思っていました。だからジェネレー
ション(Generation)の「G」
に、ネクストの意味を込めて「2」をつ
けた。あれから20年近くもその数字が
増え続けることはイメージしていませ
んでした」

営者として2年間も新ドライバーを発売
していないことに焦る気持ちはな
かったのか？
「それはありません。ピンはマーケ
ティングカンパニーではなく、エンジ
ニアリングカンパニーです。だから良
い製品を開発することが最も大切。も
ちろん、当社でも短期的な目標として
は2020年のように日本とアジアで
のマーケットシェアナンバーワンを取
り戻したいというのがありますが、長

たるジョン・K・ソルハイム氏は高校
生の夏休みにはピンでアルバイトをし
ていたそうだ。当時の祖父カーステン・
ソルハイム氏の印象を聞くと、
「カリスマ的な要素を持った創業者
で、エンジニア気質に満ちあふれた
リーダーでした。彼の手帳には決めら
れたスケジュールが一切ありません。
だから、毎日会社に来て開発チームや
組み立て工場など色んなところを見て
回りながら、何か問題があったら、そ
れと一緒に解決していくタイプでし
た。ただ、エンジニアとしては斬新な



ジョン A ソルハイム

John A Solheim

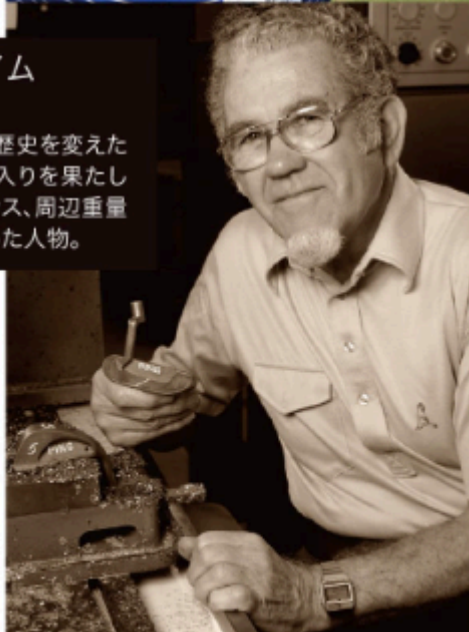
創業者カーステン・ソルハイム氏の三男。1995年
にピンのプレジデントとなり、現在は会長をつと
めている。ピン製品にデザインされている「ミスター
ピン」は彼が幼少時代に粘土で作ったものが原型。

期的な目標としては最も歴史のあるゴ
ルフメーカーになって長く存続したい
ということを考えています。そのため
には急いで新しい製品を出すよりも、
時間がかかってもパフォーマンスが高
い製品を発売する
ことです」

カーステン ソルハイム

Karsten Solheim

ピンの創業者であり、ゴルフクラブの歴史を変えた
功績を称えられて、世界ゴルフ殿堂入りを果たし
た。ピン型パター、ヒール・トゥ・バランス、周辺重量
配分など現代クラブにおける礎を作った人物。



アイデアを持っているだけでなく我慢
強く忍耐強い。私もエンジニアとし
ての我慢強さは彼から学びました」
そしてアリゾナ州立大学を卒業して
ピンに入社してからは、会長をつとめ
た父ジョン・A・ソルハイム氏と仕事
をするようになった。
「父は気配り、目配りですごく細かい
ところに気がつくタイプでした。製品
を改良する際でも、小さい改良だと思
って進めていたことが全て積み重
なって、大きな進化につながることに
あった。それは『G430』の開発にも
少し似ているかも知れません」

この2年間は
『G425』を超え
るドライバーの開
発に苦労していた
のだろうか？
「苦労していたと
いうよりも、
『G430』の開発
段階では新しい発
見がいくつもあり
ました。私がピン
に入社してから約
25年になりますが
、この25年間で『
G430』ほど大きく
進化したモデルは
見たことがありま
せん」

かつて開発を統括する責任者として
初代のGシリーズから携わってきた
ジョン・K・ソルハイム氏が
“見たことがない進化”と語った『G430』。
一体、何が変わったのか？

インパルス モーメントによる 最大飛距離と 最高の打感

「今までのGシリーズはやさしさを追求してきたので慣性モーメントや深・低重心にすぐこだわっていました。もちろん、『G430』でもそれを継承していますが、『G430』は慣性モーメントの数字だけではないやさしさがプラスされています。それを開発チームではインパルスモーメントと呼んでいます。わかりやすく言えば、どれか1つの要素ではなく、複合的に全ての要素を改善していくことでクラブのパフォーマンスを大幅に進化させるという発想です」

慣性モーメント以外のやさしさとは？

「例えば今回の『G430』のドライバーでは3つのヘッドでフェースの高さやバルジとロールの設計を見直した結果、フェースの上下に打点がズレたときでもセンターヒットに近いスピン量になるようになっていきます。これはスピンシステンシー・テクノロジーという技術で、過去にもフェアウェイウッドやハイブリッドでは採用していましたが、ドライバーに搭載したのは『G430』が初めてです。ドライバーで採用するためには『G425』と同じ製造方法では不可能だったので、製造

方法から一新しました。慣性モーメントが同じでも、打点がズレたときのスピン量が安定すれば、ゴルフアーにとってやさしく感じるはずですよ」

決してジョン・K・ソルハイム氏は大袈裟なことではない。エンジニア目線で1つ1つの進化を丁寧に説明してくれた。

「マーケティングの手法としては1つ大きなテクノロジーがあったほうが、わかりやすく宣伝しやすい。でも、ゴルフクラブは何か1つだけに特化して、それを進化させても良いクラブは生まれません。1つ1つの小さな変化が重なりあって、『G430』は大きな進化を遂げたと思います」

確かに今回の『G430』は『G425』と比べてもあらゆるパーツが進化している。クラウン部分のタービュレーターを中央部分に集めて、高さを出したことで空気抵抗を削減。フェースも薄くなったことで反発性能が向上した。さらに打感、打球音については日本に住んでいた時代の経験が生きたそう。

「打感や打球音に一番こだわりのあった、厳しいのが日本人だと思います。正直、2011年に日本に来たときは

アリゾナ州立大学では
機械科の学位とMBAを取得
し、1996年にデザインエン
ジニアとしてピンでのキャリアを
歩みはじめたジョン・K・ソルハイム
氏。ピンの社長となった今も、開発チー
ムのミーティングには毎週参加してい
るそうだ。

「今日で日本に来て3日目ですが、3
日間もエンジニアのチームと話をしな
いと寂しいというか、ちょっと落ち着
かないですね。アリゾナにいるときは
毎日エンジニアとクラブの話をしてい
ますからね」

そんなジョン・K・ソルハイム氏が
語る「見たことがない進化」とは具体的
にはどういったところなのだろうか？

ちょっとびっくりしました。でも、そ
の経験があるから、今はサンプルがで
きたら、まずは日本人に打ってもらう
ようにしています。しかも、日本人と
米国人のゴルフアーが好きな打感は違
います。だから『G430』はサウンド
リブを何度も何度も改善したこと。過
去のGシリーズでは実現できなかった
日本人も米国人も好きな打感になった
と思います。しかも、スピンシステ
ンシー・テクノロジーとの相乗効果で、
打点がズレたときでも心地良い打球音

CARBONFLY WRAP

「今回の『G430 LST』はかなりアグレッシブな設計になっています。クラウン部分をカーボン素材にして、その余剰重量を最適ポジションに配置することで慣性モーメントが大きくなった。440cmとは思えない寛容性がある、私もはじめてテストしたときから満足できました」

「『G430 LST』に関しては一般発売(11月11日)される前から、ツアーで話題になっていた。初めて『G430 シリーズ』が解禁されたPGAツアー「シュライナーズチルドレンスオープン」ではモデル別使用率1位となり、10月に日本で開催された「ZOZO」

『SFT』では初の調整機能

『SFT』の調整機能では通常の『DRAW』で『MAX』より約13ヤード、『DRAWプラス』で約20ヤードつかまる(数字はピン調べ)。

『G425』と比較するとフェースは中央部で約6%、周辺部で約9%も薄くなったことで反発性能を高めている。

『G430 LST』では8層のカーボンシートをクラウンに採用。打球音追求のために2本のリブだけでなくソール形状も一新。

CARBONFLY WRAP

NEW SOUND RIB

NEW LOFT & NEW FACE

PURFLEX

アイアンでも飛距離と音を追求して、ピュアフレックスと呼ばれる7つのゾーンに分かれた振動吸収バッジを新採用。

「ルール内でも まだまだクラブ開発の 余地はたくさんある」

John K Solheim

「クノロジーが隠されていて難解な専門用語も多かったが、
「そんなに難しい話をする必要はないのかも知れませんが。打ってもらえれば簡単にわかると思います。プロにクラブを渡すときも、『打ってください』としか言いませんからね」

「元々、ドロー設計になっている『SFT』は日本人にも人気のあるヘッドですが、今回はシリーズ初のウェイト調整機能をつけたことで「ドロー」と「ドロープラス」を選択できるようにしています。しかも、慣性モーメントが史上最大なのでミストヒットにも強いです」

開発やテクノロジーの話になるとジョン・K・ソルハイム氏は、次々と新しい話をしてくれました。25年の中で見たことがない進化には膨大な数のテクノロジー

チャンピオンシップ」ではキーガン・ブラッドリーが『G430 LST』で優勝。翌週の「日本オープン」で95年振りとなるアマチュア優勝を達成した蜷川泰果も『G430 LST』だった。また日本のアベレージゴルファーから好まれる『G430 SFT』には同シリーズ初となる調整機能がプラスされていた。



SHAFT

日本専用モデルの「ALTA J CB ブラック」も前作から設計を大幅に見直して、やさしく、安定して高弾道ボールが打てる特性になっている。

G430 LST

●SPEC
ヘッド体積 / 440cm³
ロフト / 9、10.5度
クラブ総重量 / 約309g
(ALTA J CB BLACK-S)
価格 / 9万9000円
※レフティ用あり

CUSTOM FITTING

G430 SFT

●SPEC
ヘッド体積 / 460cm³
ロフト / 10.5度
クラブ総重量 / 約293g
(ALTA J CB BLACK-R)
価格 / 9万3500円
※レフティ用あり

G430 MAX

●SPEC
ヘッド体積 / 460cm³
ロフト / 9、10.5、12度
クラブ総重量 / 約302g
(ALTA J CB BLACK-SR)
価格 / 9万3500円
※レフティ用あり

3つの哲学

フィッティングを
はじめて約60年

1人にとって

最高のクラブに

なるための

ピンがフィッティングをはじめたのは1960年代前半。それはフィッティングだけを目的にしたわけではなく、「For those who want to play their best」というスローガンに基づいたもの。日本語では「ベストのために」と頑張る全てのゴルファーのために」という意味。そのためには最高の製品を作るだけでなく、フィッティングにより最適なシャフト、グリップを提案する。そして高品質なクラブを組み立てる。その理念は現在も「PLAY YOUR BEST」という言葉とともにカスタムフィッティング、カスタムエンジニアード、カスタムビルトという3つの哲学として継承されている。「もちろん、この3つは不変の哲学です。カスタムエンジニアードは今までも伝えしてきた開発の話です。フィッティングに関しては「G430」で「ピンツアー2.0ブラック」という新しいシャフトを追加しました。このシャフトは個人的にすごく気に入っています

す。元々私はスピンの多くて、打球が上がりすぎるのが悩みだったのですが、「ピンツアー2.0ブラック」を試すと低スピンの低弾道になって飛距離が伸びました」

またカスタムビルトに関しては2020年以降、世界中でピンの需要が高まってからも、米国、日本、イギリスの3工場でしかクラブを組み立てていない。日本で発売されるモデルは、すべて日本の工場で組み立てられている。その理由について話を聞くと、

「まず沢山のオーダーに対して、供給が遅れてしまったことは大変申し訳なく思っています。この2年間は新型コロナウイルスの影響や素材の調達が遅れてしまったことで供給が遅れていました。もし、組み立て工場を増やせば、それは解決できたかもしれませんが、それでは品質が保証できません。ピンのクラブは信頼できる人に組み立ててもらったクラブだからこそ、私達も自信を持って販売できるし、自信を持っ

ピンが三世代にわたり守ってきたのは新製品に対する方針だけではない。

1959年の創業時、

カーステン・ソルハイム氏は

「For those who want to play their best」と

いうスローガンを掲げた。

それは今も「PLAY YOUR BEST」として、

3つの哲学とともに

継承されている。



CUSTOM
BUILT

CUSTOM
ENGINEERED



でプレーできる。だから、ピンがマネジメントできる工場でしかクラブは組み立てていません」

昨年、組み立て工場の注文が遅れたときはジョン・K・ソルハイム氏自らがラインに入ってクラブを組み立てていたそうだ。

「新型コロナウイルスの影響で出社できない人が増えて、ラインの人員が足りなくなってしまいました。だから、私もラインに入ってクラブを組み立てていた。私だけでなく、他の部署からも組み立て経験がある人を集めてみんなで組み立てていました。大変でしたが、久しぶりに組み立てのラインに入ってみて、クラブのことを深く考えるようになったので思っていた以上に勉強になりました」

中学生の頃からピンの組み立て工場が遊び場だったと語るジョン・K・ソルハイム氏に、昔と今のピンの違いについて聞くと、

「昔は祖父のカーستنが1人で会社を回しているような時代もありましたが、今はピンの会社の規模がすごく大きくなった。クラブの受注、生産本数も桁違いに増えていますが、それでも

ピンは1人1人のために最高のクラブを1本ずつ作っているカスタムメーカーです。だからこそ、1人でも多くの人にフィッティングを受けたり、試打してもらいたい」

今回のインタビュウ中、ジョン・K・ソルハイム氏が何度も言っていたのが「打ってみればわかるよ」というフレーズ。PLAY YOUR BEST。その答えは「G430」を打てばわかるのかもしれない。

G430 IRON

●SPEC
素材／ハイパー17-4
ステンレススチール
ロフト(7I)／29度
クラブ総重量(7I)／
約369g(ALTA J CB BLACK-R)
価格(1本)／2万6400円～
※レフティ用あり



「私自身、
去年は
組み立て工場の
ラインの中に入って
クラブを
作っていた」

John K Solheim

